

Englises に対する大学生の意識の変化
— Englises の音体系の構築に向けた基礎的研究 —
College Students' Recognition of Englises:
For Fundamental Study on Phonology of Englises

藤上 隆治
東京国際大学

Abstract

This is a teaching report of my class “Pronunciation of English.” This class consisted of 30 class periods per semester. I taught the features of English pronunciation theoretically and practically for the first half, and then I lectured on Englises for the second half. There were two objectives for this class. One was to have my students understand the features of English pronunciation. The other was to have them recognize that there are a wide variety of Englises in the world and that each English has its own features in terms of pronunciation, expressions, and vocabulary.

This report unveils the results of the survey conducted in my class. As a matter of fact, 92 students out of 134 students (valid responses) said that they were not aware of the existence of Englises.

This report also reveals that 117 students affirmatively answered the question “*Was the lecture on Englises useful for you?*” It shows that the lecture was useful for the students in terms of “pronunciation,” “expressions,” and “vocabulary,” ranked in this order.

The report concludes the importance of showing the students not only American English and British English but also the other Englises, so as to help them think and act from multiple angles as well as respect each one of the Englises.

キーワード: Englises, 大学生, 音声, 発音,

科目名	英語の音声
対象者とクラス人数	大学 2 年生から 4 年生 174 名 (英語専攻あるいは英語専攻 予定の学生が約 75%)
学習の目標	1. 英語の音声特徴が理解できている。 2. 世界ではいろいろな国や地域で英語が話されていて、それぞ れの英語の発音に特徴があることを認識できている。

1. はじめに

本稿は、ある大学において **Englishes** を取り上げた授業（「英語の音声」）の実践報告である。そして、今回は、授業を通じて、**Englishes** の存在に対する履修者の意識の変化に関する報告を試みるものである。

いままでも **Englishes** について若干触れてはいたが、今回は、30 回の授業のうち、およそ半分を **Englishes** の講義に充ててみた。その理由は次の 4 点である。1 点目は、英語がおよそ 110 の国と地域で使われており (Ethnologue 2012)、ビジネスでは欠かせない言語 (*THE DAILY YOMIURI* 2004 年 4 月 13 日、岩田 2007 : 12、松崎 2015 : 216 など) であることから、これからますます **Englishes** の存在が重要になると考えられるからである。

2 点目は音声の土着性を英語学習者に認知させることである。イギリスの容認発音やアメリカの標準的な発音の特徴を教えることは大切なことである。私も授業で教えている。しかし、授業を通じて思うことは、森住 (2008:12) が指摘するように、言語事象の中で文法や文字などに比べると、発音、表現、語彙は相対的に土着性が強いのである。

3 点目は英語学習者の個性の尊重である。たとえば、外国語としての英語の発音には母語の影響があり、それを完全に払拭することはできないし、払拭すると結果的に英語学習者の個性が失われてしまうことにつながると考える。英米の発音を教える一方で、**Englishes** の音声特徴も教えれば、「さまざまな国や地域の英語の多様性・独自性に関心をもち、尊重する精神」(橘 2011:55) を英語学習者に理解させることができるのではないかと考える。

4 点目は音声に対する意識の変化を英語学習者にもたらす可能性である。森住 (2008:9) が指摘するように、英語学習者は自分が教室で教わった発音と異なる英語の発音に遭遇した場合、その発音 (往々にして非母語話者の発音) よりもやはり日本人の発音のほうが上手であるという優越感を、母語話者の英語の発音に対しては自分の発音はまだまだだという劣等感を抱いてしまう場合がある。筆者は **Englishes** の音体系が構築できれば、英語学習者がそのような不遜な優越感や不必要な劣等感を抱かないですむように思うのである。

Englishes に対する大学生の意識の変化

以上、学術的な観点から述べてきたが、筆者の実務経験からも若干触れておきたい。会社勤めをしていた 20 数年間、アメリカ、イギリス、オーストラリア、スイス、シンガポール、韓国の企業と英語で仕事をしてきた。また、フィリピンやメキシコからの移民とともに英語でビジネスに従事した。この実務経験からしても、世の中にはいろいろな英語が存在し、それぞれの英語を尊重するという考え方を英語学習者に教えることは人格形成において必要だと考える。

2. 授業の概要

2.1 授業全体

本授業の全体像は次のとおりである（表 1）。

表 1

授業名	英語の音声
授業形式	主に講義形式
授業実施時期	2015 年度前期（4 月から 7 月）
授業回数	30 回（週 2 回）
授業構成	「英語音声学の基礎」編と「Englishes」編
履修者	大学 2 年生から 4 年生。 (英語専攻あるいは英語専攻予定の履修者が中心)
履修者数	174 名（定期試験を受けた履修者数は 154 名）
必修・選択の区別	選択必修科目
使用テキスト	・「英語音声学の基礎」編：授業担当者作成のプリント ・「Englishes」編：田中春美・田中幸子編『World Englishes —世界の英語への招待—』昭和堂。

2.2 本授業の目的と到達目標

本授業の授業名は「英語の音声」である。英語音声学の授業とも言えるが、もう少し広く捉えて、次の 2 点を本授業の目的とした。1 点目は、日英対照学から見た英語音声学の基礎を教えることである。母語と対照することが外国語教育に必要であることは大切だからである。この点についてはすでに明治時代の文献（八杉 1901:45）で指摘されている。できるだけ日本語の音声特徴と比較しながら、英語の音声特徴を説明すると、日本語の音

声と英語の音声には類似点が多いことがわかってくる。たとえば、"shine"（[社員]に似ている音）や "hour"（[泡]に似ている音）などである。

もう 1 点は主に音声特徴を通じて **Englishes** の存在を教えることである。日英両語の音声に類似点があることに気づくと、何も英語母語話者のような発音を身につけることを発音習得の最終目標に掲げなくても良いことがわかってくるのである。むしろ、英語母語話者のような発音でなくてはならないと学習者が思い込み、かえって発音に恐怖感を覚えるのは本末転倒である。英語母語話者のような発音を身につけたいとの見方がある一方、母語の音声特徴が残っている英語の音声でもコミュニケーションが取れるとの見方も示すことも大切だと思う。両方の見方を学習者に見せることで、学習者は比較対照しながら、**Englishes** の存在について自分の考えをまとめることに繋がると思われる。

以上の目的を踏まえて、本授業の到達目標を次の 2 点とし、本稿では(2)について述べる。

- (1) 英語の音声特徴が理解できている。
- (2) 世界ではいろいろな国や地域で英語が話されていて、それぞれの英語の発音に特徴があることを認識できている。

3. Englishes 編の授業

3.1 Englishes 編の構成

本授業は、半期 30 回で構成されている。第 2 回から 14 回までの 13 回分を英語音声特徴の講義に、第 16 回から 27 回までの 12 回分を **Englishes** の講義にそれぞれ充てた。

Englishes 編では、授業時間の関係上、イギリスの英語、北アメリカの英語、オセアニアの英語、イギリス以外のヨーロッパの英語、アジアの英語を取り上げた。具体的に授業で取り上げた英語をテキストの目次に沿って分類すると、「母語話者の英語」（イギリス英語、アメリカ英語、カナダ英語、オーストラリア英語、ニュージーランド英語）、「公用語／第 2 言語話者の英語」（インド英語、シンガポール英語）、「国際語／共通語としての英語」（ドイツ英語、オランダ英語、ロシア英語、フランス英語、スペイン英語、日本英語、中国英語、韓国英語）になる。

3.2 Englishes 編の授業の進め方

Englishes 編では、大きく次の 3 点を踏まえて講義を進めた。まず、英語が誕生あるいは伝来した歴史や社会的な背景を踏まえ、語彙や表現にも触れながら、**Englishes** の音声特徴を概説した。次に、それぞれの英語の音声を聞かせてみた。時にはディクテーションの実施も試みた。最後に、再度音声を聞かせて、履修者に **Englishes** の音声特徴に対して

理解してもらうことに努めた。

4. Englishes に対する履修者の意識調査

4.1 調査方法

筆者が本授業全体に関するアンケート（資料参照）を作成し、Englishes の講義を終えた日に履修者に配布した。そして、その場で回答してもらい、当日出席した履修者全員から回収した。有効回答数は 134 であった。アンケートは無記名であるが、学年と専攻科目によって回答が違うかもしれないとの考えを踏まえて、学年と専攻だけは記載してもらった（本稿では、紙数の都合上、これらの要素を含んだ分析までは言及しない）。

4.2 結果

本稿では Englishes の認知度と Englishes の講義の役立ち度に絞って、結果を述べてみたいと思う。

4.2.1 Englishes の認知度

「この授業では、Englishes とはくさまざまな英語の種類である」と説明しました。この Englishes をあなたは知っていましたか？1つ選んで回答してください。」との質問を通じて履修者の Englishes に対する認知度を測ってみた（図 1）。

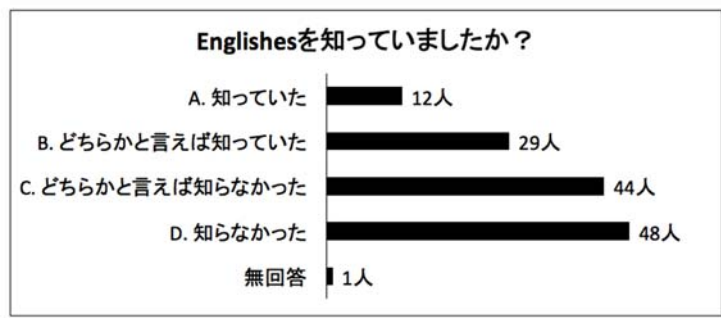


図 1

Englishes の存在について、「知らなかった」と「どちらかと言えば知らなかった」を合わせると、92名の回答者が Englishes の存在を知らなかった。これは有効回答者数（134名）のおよそ 69%にあたる。

4.2.2 Englishes の役立ち度

「この授業で Englishes を取りあげましたが、あなたの役に立ちましたか？1 つ選んで回答してください。」との質問を通じて Englishes の講義が履修者に役に立ったのかどうかを測ってみた (図 2)。「役に立った」と「どちらかと言えば役に立った」を合わせると、役に立ったと感じている履修者が 117 名 (全体のおよそ 88%) いることがわかった。

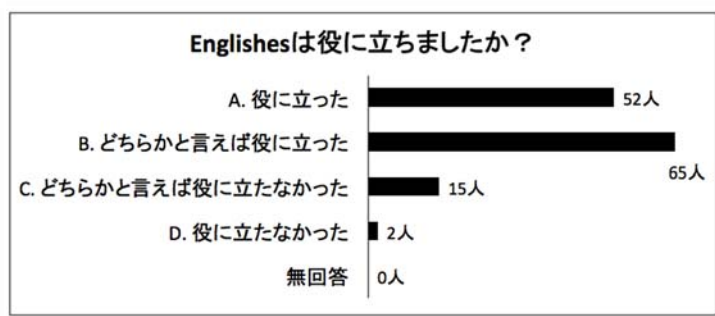


図 2

合わせて、役に立った項目も聞いてみた (複数回答可) (図 3)。役に立った項目を答えてもらった回答数を多い順に並べると、「発音」「表現」「語彙」「文法」「無回答」「その他」である。この順番だったのは、本授業が音声を扱う授業だったことが関係していると思われる。しかし、「発音」「表現」「語彙」については、土着性が強いことはすでに「はじめに」で述べたとおりである。この「土着性が強い」点に履修者が理解を示したことが本質問の回答に影響しているのではないかと考えられる。

さらに、役に立った項目を複数回答した履修者にその中から 1 つだけ役に立った項目を挙げてもらった (図 4)。回答者数は 66 で、そのうち「発音」と回答した履修者数は 36 と多かった。これは授業が音声を扱う授業であるため、音声に対する履修者の関心が高いからだと推測できる。

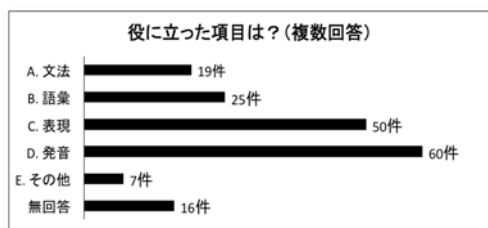


図 3

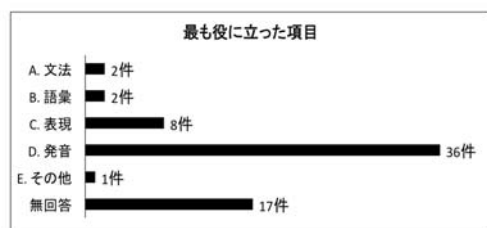


図 4

5. 考察

Englishes の存在を知らないと回答した履修者が 92 名いた理由の 1 つとして考えられるのは、アメリカ英語など特定の英語にしか触れてこなかったからかもしれない。神谷 (2008:53) は日本ではアメリカ英語やイギリス英語が多くの学校で学ばれている現状を指摘しているが、今回のアンケートに書いてあったコメントの中にも、この状況が垣間見える。もちろん、これが理由であると断定するには、さらにデータが必要である。しかし、興味深いコメントなので、その一例を以下に挙げてみる。

- 「アメリカ英語を話すのが本物の英語じゃないと学びました」
- 「アメリカ英語が正しい英語だと思い込んでいたので、視野を広げることができてよかった」
- 「アメリカ英語の発音しか知らなかったので、刺激的な授業であった」
- 「世界にはさまざまな英語があり、決してアメリカ英語が全てではないということを知った」
- 「英語には本当に様々なものがあって、一概にアメリカ英語が全てとは言えないのだということ学んだ」
- 「アメリカ英語を勉強するだけでなく、世界で使われる様々な英語を知ることが大切だと思うことができた」
- 「今まで発音のかわいいアメリカ英語を手本にしてきたが、その前に様々な国の英語の存在と特徴とノンネイティブスピーカーの方が多いことを知る必要性を感じた」

橘 (2011:67-68) が「英語教育において、ことばへの気づきや関心を深めるために比較言語・比較文化的な視点を取り入れることが必要不可欠だと考えている」と説いているように、ことばへの気づきには比較・対照が必要である。「役立った」と回答した履修者の中で、発音に対する回答が多かったことにすでに触れたが、履修者のコメントを読むと、さまざまな英語を比較対照することで、履修者自身の発音に対する考えが見て取れる。

- 「英語を今まで狭い視野で見ている。私たちと同じノンネイティブスピーカーはたくさんいて、まだまだ世界で見ると日本英語も頑張らないといけないと思った」
- 「日本語のような英語の発音は個人的にダサイと思っていて、私は高校生の時にアメリカに留学して、アメリカ人っぽく話せるようになって帰国したけれど、その考え方がはかないものだった。この授業で日本語のような英語も良いじゃないかと思えた」
- 「今までは日本語英語をダサイと思ったり、ネイティブに近づくことが全てだと思っていたけれど、この授業を通して、考え方が 180 度変わったと思う。様々な英語受け入れる姿勢を大

切にして、劣等感を持たずに、自分の目指す英語を習得できればよいと思った。本当に大切なことやためになることをたくさん学んだ」

- 「英語話者にはその人たちの母国語の特色があったりするため、アメリカ英語とイギリス英語のみ聞き取ることよりも、幅広い英語を聞き取れることの方が重要だと思った」
- 「様々な英語の発音の仕方を学ぶことは、これからの私たちに必要であり、興味深かった」
- 「言語の数だけ英語の発音が違うことを知り、これから生きていく上で知らないより知っている方が絶対有利だと思う」
- 「日本人は特に英語が苦手で変な発音なんだと思っていたけれど、日本人だけではなく、その国独特の英語があると言うことをこの授業で初めて知った」

以上述べたことを踏まえると、本授業の到達目標 (2) を完全に達成できたと言うには早計である。今後も引き続き、授業実践を積み重ね、研究を深めていかななくてはならない。しかし、今回に限って言えば、Englishes の存在を知らなかった履修者がおよそ 69% いたことは、本授業で Englishes を取り上げた意味があったと思われる。

6. おわりに

Englishes の音体系を構築するための基礎的研究を始めるにあたって、今回、英語の音声扱う授業で Englishes を 12 回講義し、Englishes に対する履修者の意識の変化を述べてきた。そして、Englishes の存在を知らない履修者の方 (92 名。およそ 69%) が多かったことがわかった。また、Englishes が役立ったと回答した履修者が 117 名 (およそ 88%) いたこともわかった。さらに、役立った項目として、土着性が強い「発音」「表現」「語彙」を履修者は挙げていた。この「土着性の強さ」に履修者が一定の理解を示したからだと考えられる。

今後の課題は、2 つある。1 つは、英語母語話者にも非母語話者にも通じる英語の音声特徴を日本語母語話者が「身につける (productive) 英語の音声特徴」と「聞いて理解する (receptive) 英語の音声特徴」の 2 つに大別し、音声面から Englishes をさらに研究することである。

もう 1 つは、いわゆる Inner Circle (「母語話者の英語」)、Outer Circle (「公用語／第 2 言語話者の英語」)、Expanding Circle (「国際語／共通語としての英語」) の英語を授業でできるだけ均等に扱うことである。今回は時間の都合上 Outer Circle の英語を取り上げる機会が少なかったためである。

最後に、筆者は英米の発音など英語母語話者の発音を否定する考えは全くない。授業で

Englishes に対する大学生の意識の変化

これらの英語の音声特徴も教えている。ただ、そればかり教えるのでは、履修者の考え方のバランスが崩れてしまう。それも含めて、Englishes の存在を認知し、それぞれの英語を尊重する精神を持った大学生をできるだけ多く育てたいと思う。

参考文献

岩田京子 (2007) 「企業内英語教育の現代的諸相」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』 39, 11-18 .

神谷雅仁 (2008) 「日本人は誰の英語を学ぶべきか—World Englishes という視点からの英語教育—」『上智短期大学紀要』 28, 41-71 .

橋広司 (2011) 「日本の英語教育が抱えるべき EIAL の言語観・英語観—中学 1 年生の実態をふまえた 6 つの留意点—」『国際教育研究所紀要』 18, 55-71 .

松崎正年 (2015) 『傍流革命』 東洋経済新報社 .

森住衛 (2008) 「日本人が使う EIAL—立脚点・内実の方向性・教科書の扱い—」『アジア英語研究』 10, 7-23 .

八杉貞利 (1901) 『外国語教授法』 寶永館 .

"Attention workers: Executives say English essential to your careers" *THE DAILY YOMIURI* 2004 年 4 月 13 日 .

Ethnologue <http://www.ethnologue.com/> 2012 年 2 月 18 日現在 .

資料

アンケート

注：このアンケートは、成績には全く関係ありません。みなさんの意見を聞いて、今後の授業運営や授業内容などを検討する際に参考にします。率直な意見を聞かせてください。お願いします。

- ・ 学年：_____
- ・ 専攻（専攻がまだない場合には専攻予定を書いてください）：_____

1. この授業では、Englishes とは「さまざまな英語の種類である」と説明しました。この Englishes をあなたは知っていましたか？1 つ選んで回答してください。
A. 知っていた
B. どちらかと言えば知っていた
C. どちらかと言えば知らなかった
D. 知らなかった
2. この授業で Englishes を取りあげましたが、あなたの役に立ちましたか？ 1 つ選んで回答してください。

- A. 役に立った
B. どちらかと言えば役に立った
C. どちらかと言えば役に立たなかった
D. 役に立たなかった
3. 2で「役に立った」「どちらかと言えば役に立った」と回答した方にお聞きます。役に立ったのはどれですか？（複数回答可）
A. 文法 B. 語彙 C. 表現 D. 発音 E. その他 _____
4. 3で複数回答した方にお聞きます。その中で最も役に立ったのは何ですか？ 1つ選んで回答してください。
A. 文法 B. 語彙 C. 表現 D. 発音 E. その他 _____
5. この授業で取りあげた英語圏の **Englishes** の中で興味を持った英語はどれですか？（複数回答可）
A. イギリス英語 B. スコットランド英語 C. アメリカ英語
D. カナダ英語 E. ニューージーランド英語 F. オーストラリア英語
（できたら結構ですので、何か例も書いてください。「こんな点に興味を持った」「こんな経験をした」など）

6. この授業では、かつての植民地における **Englishes** の中で次の2つを取りあげました。興味を持った英語はどちらですか？（複数回答可）
A. インド英語 B. シンガポール英語
（できたら結構ですので、何か例も書いてください。「こんな点に興味を持った」「こんな経験をした」など）

7. この授業で取りあげた外国語としての **Englishes** の中で興味を持った英語はどれですか？（複数回答可）
A. ドイツ英語 B. フランス英語 C. スイス英語 D. スペイン英語
E. オランダ英語 F. ロシア英語 G. 韓国英語 H. 中国英語
I. 日本英語
（できたら結構ですので、何か例も書いてください。「こんな点に興味を持った」「こんな経験をした」など）

8. 自由記述
Englishes の解説を聴いて、**Englishes** に賛成・反対だったり、気づいたり、驚いたり、満足したり、自分自身の役に立ったり、自分自身の意識が変わったなど、何でも自由に書いてください。
ご協力、ありがとうございました。